
赤弓渡の伏平夏!

空駆南麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤弓渡の伏平夏！

【Nコード】

N6202U

【作者名】

空駆南麻

【あらすじ】

中学二年の時、転校生と一緒に学級委員になった私は事件に巻き込まれる。……すまない。軽くいじめられただけだ。しかもすぐに解決した。だが、それは私のまわりにとって眠れる獅子をメガホンで罵り起こすような行為だったわけで……。ああ、結果としておかげで私は恋に勉強に大忙しだよ。……本音はどちらもどうでもよく面倒臭いんだがな……

この小説は基本的に以下の登場人物で構成されます。

すべてを面倒臭いで片づけられるだるがり主人公「赤木准」
不良モドキのお人よし優等生委員長野郎「夏目祐樹」
楽しければそれよし！今を全速力で走りたい「渡会凜」
おせっかい焼きの活発迅速少女「弓素明音」
いつもみんなの常識役、脇キャラに甘んじます「伏瀬将門」
猫飼い霊見え超身体能力の非凡生命体「平郷秋良」

ハルウララ

春つらら、とても言うべきか。春の日差しは柔らかく暖かい。冬の冷気がまるで嘘だったかのようなこの陽気が私にはなによりも好きだ。こういう日は日当たりのいいところに寝転んでいたいのだが……
「今日からお前たちみんな中学二年生だ。後輩たちのいい見本となるように春だからって気を抜かずに、しっかりと学校生活を送るように」

すでに幾人かの陽気に負けて同級生は机に突っ伏している。すぐ後ろの席の幼馴染も静かだから恐らくそうだろう。たとえ寝てなくても、この初老の担任教師の話を一体何人がまじめに聞いているのだろうか。

クラス替えのないこの学校では教室が変わっただけで3学期の初めにした席替えもそのままだ。一体何人が進級した実感を感じているのだろうか。少なからず私はそんなものは感じていない。春の到来は実感しているのに不思議なものだ。

「……お前ら、ものの数分の話も聞けんのか。まったく、後輩に尊敬されるような先輩になりたいとは思わないのか」

担任は憂うようにため息をついている。ここでの行いがそれに直結するとは思えないが。まあ流石に校長の話のあとでよくそんなに寝ていられるな、とは思えてきた。あれの間寝ていたから今は全く眠くない。できることなら今だって寝ていたい。睡魔が夢への橋渡しを行ってくれるのなら片道切符だろうと行つてやる。

「……実は転校生をこのクラスで受け持つことになっているのだが……」

見回しながらの担任の言葉にざわつく教室。

「ま、いいだろう。呼んでくるから静かに待っている」

といわれたが教師が出るや否やすぐに教室は騒然となる。寝ていた者もたたき起こされている。

「どんなヤツだろいねえ、転校生」

いつの間にやらすぐ後ろの席の凜も目を覚ましている。

「面白いやつならいいんだけどねえ。そこらどう思うよ赤城」

「お前みたいのじゃなければいい。これ以上騒がしいのは御免だ」

「マツタマター。友達すくねークセにい」

「それとこれは関係ない」

私も同じ穴のムジナだから言わんでおくが、だいいちお前も他人とウマが合わんから友達少ないだろうかと。

「んにしてもさー、こんなときでもドン暗い顔してられんのは相当のネクラちゃんですよ赤城い」

「ならばなにか。『これでまた友達増えるぞひゃっほう！』という顔だな、凜くん」と半ばにやけながら言った方がいいか」

「いやそこまで言えたあ思ってたないよ。ただもうチヨイ明るくなるーぜってことさ。ていうかなんでそんなライライダー二さんみたいな言い方なのさ」

「知るか。誰だそいつは」

「リトバス」

またよく分からん漫画のネタを……いやアニメか？ まあどうでもいい。

「よし、賭けだ。転校生が男に百万両！」

嬉々として財布を出してくる。

「女子に十円」

「おいおい、賭けにやらんぜ、もつと賭けろよ」

「言っておくが私は百万世帯を一年間養えるほどの金はない」

「いや百万両って百円って意味だから」

「わかってる。ご隠居さんがよく使ってる」

「駄菓子屋さんのとこの？ いやー、あの人も長生きだよねえ。私たちが生まれる前からジジイやってるし」

「先の大戦も生き延びてる人だ。運がいいのだろう」

「そついえば絶対徴兵くらってる歳だよ、つと？」

廊下をのぞいていた男子があわてて席に戻ってきた。教師が戻ってきたのだらう。急に教室が静まり返る。

「黒板に自分の名前書いた方がいいですか？」

うなずく教師に黒板に向かう転校生。大きく黒板の中央に縦に書いていく。……結構きれいな字だな。名前を書き終えた転校生がこちらに向き直る。

「茨城の方から転校してきました夏目祐樹です。よろしく願います」

至って模範的だ。それに少しは整った顔をしているみたいだ。身長は、目測で165ぐらいか。……なんか男漁りしてるみたいでいやだな。

「夏目は保護者の都合で引越してきた。クラスに溶け込めるように仲良くするように。では、夏目の席は窓際の最後尾だ」

それを聞くと転校生は同級生の注目（私含む）を受けながら移動し席に着いた。

「なんかもつと問題児みたいなの来ないかねー」

……そんなことをつまらなさそうに言った、すぐ後ろの席の幼馴染みと仲良くするのもなんかいやだ。私は平穩無事に暮らしている。

「別にどんな奴でもいいだろう」

「いやさ、赤城。私にとっちゃ、これはもう死活問題クラスだよ。退屈そうだよ、あんなのと仲良くしても」

「転校生だからって仲良くしなくてはいけない道理なんてない」

「でもそれはひどいっしょ」

「私語やめ！ まったく、ことあるごとに喋るんじゃない」

「ではこれから委員会を決めたいと思う」

黒板に委員会の名前が書かれていく。……どれもこれも面倒臭そ

うだ。

「まずはじめに学級委員。女子一、男子一だ。誰かやりたい奴はいるか」

学級委員は早い話、クラスの雑用みたいなものだ。……やりたくない。

「……別に推薦してもいいぞ」

しばらく待ったが誰も手をあげなかったらしい。痺れを切らした担任がそういった。……なんだろう、イヤな予感がする。

「……なんだ、渡会？ お前が立候補するのか」

なるほど、凜が手を挙げたのか。……ますますイヤな予感がしてきた。コイツは私を面倒臭い事態に置きたがるからな。小学高学年時に飼育係というこの世で最も面倒臭いものに私を巻き込んでくれたからな。

「いや、違いますって。わたしがそんなことするガラじゃないってことはわかってるっしょ。推薦ですよ、すーいーせーん」

「ああ、わかった。誰を推薦するんだ」

「赤城さんです」

やっぱりかっ。やっぱりそうなるのか。

「ついでに理由を聞いていいか」

「親友として赤城さんのことはよく知ってるので。まあ、一年間無難にこなしてくれると思ひまして」

しかも理由は普通（と言えるのか知ったこっちゃないが）、他に立候補者がいない限り他薦でも学級委員に強制的に決定だ。誰か女子で立候補しろ。もしくは推薦しろ！

「してやつたり」

凜がつぶやくのが耳に入る。

「待て！ お前、なぜ推薦したっ！」

私は後ろを向いて小声で怒鳴るという試してみると案外現実でもできる技能を使った。

「いやま、面白そうじゃん」

「どこかだ。私はすぐぶるつまらないぞ、このいじめっ子気質」

「えー、面白いじゃん。推薦されたらやる気なくてもさせられるつてのは」

「……お前と付き合ってるとうるくなことがない」

「赤城に強制勉強を執行されるテスト前後は、私にとつちや地獄だよ。だから、その仕返し」

人が一応善意でやってることに對してそれか！……確かに幼き日の意趣返しも半分入っているが。

「ほらほら、赤城。男子に推薦一人来たよ」

「……」

無言で凜の指差す方向を見る。

「理由？ いや、あれですよ。なんつーか、そう！ 親友ですから、こいつなら頑張ってくれるんじゃないかとー。なあ平郷！」

推薦者は宮島でされたのは平郷か。軽率でなんかしゃべり方からして頭の悪そうなやつだ。二人ともできるだけ関わりたくない。クラス替えがなかったことを恨むな。

「災難だねえ、平郷も。いじめられっ子も大変だ。静かに暮らしたいだろうに。ま、しゃーないけど」

「お前にだけは言われたくない。あとお前にもそのくらいの災厄は来てもいいと思う」

平郷は一年の頭からいじめられてるという話だ。

「……」

しかし、ああも根暗だと目を付けられるだろう。結局は本人の性格がもたらした結果だ。何度か放課後の教室で殴られるのを目にしているが、反撃したり悪態をつくのは見たことはない。格好のいじめの的だろう。表情も仏頂面でほとんど変わらない。長くなりすぎた前髪から時折覗く眼は常に危なげな光を帯びている。さらに表情と声に乗っている感情が違ふことが多々あるからどこか不気味がられてる節がある。さらに平郷をいじめているのは集団。だから誰も助けようとせずに傍観しているのだろう。かくいう私もそうだ。

昔はあれでもいじめる側の奴だったが……小学低学年の頃の話だ、力関係などいくらでも変わるだろう。おまけに私は当時被害にあつたクチだからな。今だってあまりかわり合いたくない。そこまでひどい目に合わされたわけではないがここまで引つ張ってきてしまった苦手意識を早々変えられるものでもない。

「では確認するが、ほかに推薦や立候補はいないな。いたら今のうちに手を挙げるように」

つと、他に立候補者がいるように祈るのを忘れてた。……もういい。面倒臭いからさっさと終われ。もう一年でもやってやる……。そうして、私があきらめた時だった。

「……夏目。お前、手を挙げているが推薦でもするのか？」

転校生が？ 窓際の最後尾を向くとほとんどの生徒がそこを見ていることに気付く。

「先生。俺は転校したばかりで名簿は見せてもらいましたけど数人の名前しか把握してない、というより誰も知らないんですが」

「……立候補するのか？ 転校初日に？」

担任の声色は正に「信じられない」とでも言いたげだった。

「学校に慣れるのはそれが手っ取り早いと思っただので」

「稀有な奴だ。本当にいいのか？」

「先生がいいならですけど」

「いや、こっちとしても推薦でいやいややってる生徒を使うよりは、自薦でやりたがっている生徒の方がいい。では、ほかに立候補や推薦は」

途端に数人の女子から手が上がる。恐るべし、転校生パワー。……まあ、これで私が学級委員をやらなくて済むならそれでいい。

しかし、そうは問屋が卸してくれなかった。結局私が学級委員をすることになった。

経緯を説明するところなる。

なぜか全員推薦だったのだ。ここでも宮島と平郷みたいな力関係

が働いているようだった。女子のソレはもつと陰湿なものらしいがそんなの知らん。私はそこらへん無縁だからわからん。ついでに言うと凜も無縁なクチだ。

推薦多数という事でクラス投票が始まり、結果として私が当選したという事だ。ちなみにクラス投票にあたって立候補者（とはいってもこの実際にはやりたくない連中である）が演説という名の自己アピールをすることになっているのだが……他の女子は多少乗り気ではなかったものの自分が学級委員をしたい旨を言っていたにもかかわらず、私は「投票したければしろ」としか言っていない（もちろん担任に軽く怒られた）。にもかかわらず、なぜ当選したのか。はなはだ疑問だ。しかも投票用紙に名前とともに書かれていた理由は「この中で一番しっかりしてそうだから」らしい。……おかしいだろ。このクラス、一年のころからうすうす思っていたが……おかしいだろ。こんな面倒臭いのが嫌いで、マジメなふりをする気もない奴のどこがそうなんだか。

余談だが学級委員は修学旅行期でもないと本当にクラスの雑用でしかないの、ほかの委員会と兼任が可能なのだが……あの転校生、夏目は図書委員にも立候補した。図書委員は性別問わず二名。またも推薦合戦となったが、平郷が立候補したことで終わった。思うのだが、そんなにお近づきになりたいなら立候補しろと思うのだが。やはり自分がやるのは嫌なだけか。

さて、やつとこさHRがおわり、明日からは平常授業。……学級委員とか本当に面倒臭いな。転校生だけに押し付けるか？ そんなことを思っていた時だった。

「あー、いいかな？」

「あ？」

振り向くと転校生だった。……今のは初対面の相手に対しては流石に無愛想すぎたか。

「夏目祐樹。さっき自己紹介したけど、一応。よろしくな」

「……………」

……若干、罪悪感が襲う。なんというか、人当たりのよさそうな奴だ。

「赤城さん、だよな」

「ああ。赤城准。……一応、よろしく」

「その幼馴染の渡会凜だ……って、どうした？」

凜が名乗った途端、なんかすごく嫌なものを思い出したような顔を
をした気が……。

「あ、いや。なんでもない。よろしく」

と言うその後ろには平郷。珍しく髪を左右に分けて眼鏡をかけている。そんなものつけてたかと一瞬思ったが、普段前髪で隠れて見えにくいし長い髪を放置してたら目に入って視力も悪くなるだろう
と思い放置。普段見て見ぬふりをしているのにここだけ話しかける
のもなんだからな。

「……………夏目行くよ」

「ツと、じゃ、俺はこれから図書委員だから」

そういつて、後ろに控えていた平郷と一緒に教室を出て行った。

「……平郷と知り合いだったのかね」

なにを思ったやら凜がそんなことを言い出した。

「……………何故そう思った」

「いや、ほぼ他人同然の人にすぐ背後にほぼ無言で立たれるっていや
じゃん。なのに、そんな平郷に怪訝な顔一つしないなんてさ。だから、
そう思ったけど……いや、いいヤツなだけかもしれないけど」
「そうなんだろ。帰るぞ」

ちなみに夏目は図書委員会でも二年生副委員長になったらしく、
三日後には一部から「委員長」のあだ名で呼ばれるようになり、本
人も嫌がっている風ではないのでそれはすぐに広まった。あだ名な
ぞ面倒臭いものでしかないと思ってる私は呼んでいないが。

そんなこんなで一週間もすればすっかりクラスになじんでしまい。

おかげさまで面倒事なしにやっていけそうだ。

ハルウララ というわけでもない

四月末平日火曜。今日も晴天だ。雲一つない日本晴れの青空が早すぎるサザエさん症候群にかかった私の心を晴らして……くれればこの面倒臭がりな性分もさっさと解消されるだろうに。残念ながらこんな日は何やら青空にあざ笑われてるような気がしてならない。

もっとも曇っていても雨降りだろうとあざ笑われてるような気がするが、晴れの日は何なんというか「雨でも降ってれば憂鬱もごまかせるだろうが残念ながら曇ってすらないよっ！」と言われている気がする。ずいぶんと意地の悪い青空だ。一番ダメなのはそんなこと感じてる私に他ならないのだが。晴天青空が私の憂鬱な心境とものの見事に反比例してくれていつそムカついてくる。

とまあ、こんな無駄なことを考えてる暇も余裕もない。遅刻寸前の時間帯で家を出たので考えながら歩いてスピードが落ちると遅刻しかねない。遅刻が続くと内申に響くからなあ。四月だけでももう5回も遅刻している。そろそろまた反省文の一つでも書かされるのではないか？ それは面倒臭いな、じゃあ少し走るか。……ナメケモノ並の体力だからやめておこう。と思った矢先に手を引っ張られ強制的に走らされる。

「アンタなにちんたら歩いてんのよおっ！」

私の手を引っ張りながら走っているのは遅刻仲間の弓素だった。こっちを向いてほぼ怒鳴り声で言うてくる。そんな怒るとしわがでるぞ。

「走ると疲れるだろう」

「もう走らないと遅刻確定だから！ ガッコ着くまで手離さないからねえっ」

無駄に怒鳴ってるからか息切れしてきている。一言しか言っていない私が走り始めて百メートルほどだというのに息切れしてるのはおそらく鍛え方と栄養の取り方の違いだと思っておこう。向こうのほ

うがいい意味で肉付きがいいしな。揺らすのはそのポニーテールだけにしてほしい。中学生にしてはお前は発育いいほうだと自覚しているのか？

「なんか失礼なこと言わなかった？」

「いやあつ、疲労によるつ、幻聴、だろう。少つ、し歩いたらどうだつあ？」

「すでに疲労困憊なアンタに言われたくないわ……」

そういえばその気になればナマケモノは走れるし泳げるらしい。微動だにせず木にただぶら下がっているのは天敵から隠れつつエネルギー消費を最低限に抑えているためらしい。ただそのぶら下がっているのだって相当体力がいるだろう、つまり私の体力はナマケモノ以下というわけだ。というか私は野生動物だったら体質的に淘汰されていそうだ。ああ厳しいかな野生の世界。とりあえずもう足を動かしたくない。

「ちょ、あんたスピード落ちてるからっ！　ほぼあたしが引きずちやつてるからちゃんと走りなさいよ！」

「ムリっ、だ。疲れた……」

「アンタは体力なさすぎんのよ！　つたくもつ、ちよつとだけ歩くからね」

ああ、ようやく一息つける……。深呼吸深呼吸……

「なんでそんな壊滅的に体力ないのよ……」

「運動不足、っだ……」

「いやそこら辺の運動音痴ももうちょい体力あるから。ほら、歩きなさいよ」

あー、普通にやばい。なんぞ朝に食べたものとか吐き出しそうだ。「すまん……背中さすって……」

「あー、もうしょうがないわねえ……」

こんなやり取りを悠長にやっていたので弓素の奮闘むなく遅刻した。すまない弓素。今度遅刻まで予断を許さない状態だったら置

いて行ってくれ。……だが体調不良の私を看護していたという名目で弓素は遅刻を不問に付されたのに対し、私はしっかり放課後生徒指導室への筆記用具持参の上で招待されたのが納得いかない。確かに私の運動不足は自助努力が足りないといわれても仕方ないが、そこは遅刻しないように全力疾走したというところを勘案し……た上で生徒指導室なんだろうなやはり……。嗚呼、絶対学級委員であるところをチクチクについて説教された後に反省文書かされるんだろうなあ……。

休み時間、放課後の生徒指導室の件を話すと凜は

「なら遅刻スナナヤー」

まったくもってその通りだ。

「んで、気分どう？ 治った？」

「まだ少しな……。胃には何も入ってないはずなのに吐き気がする」
火曜日は体育がないのが救いだ。

「二限目は数学だったよな？」

「そうそ、スーガク。めんどっちいねえ」

「………君の場合なんでもめんどくさいと思うよ」

………いつの間に沸いて出たやら平郷がそこにいた。今日は前髪で目が隠れている。

「平郷はどの授業でも前髪でノートとれそうにないけど」

「板書はとってるよ。それ以外は知らない」

「なんだとう！ その前髪でノートをとれるなんて………念写能力の持ち主！？」

そんな馬鹿な。ていうか透視じゃないのか。

「そう。僕は念写能力を持っている」

「なにい！ ま、まさか冗談で言ったことが事実だとわっ！ ……で、いかにして念写すんのー。おせーてー」

「知りたいのかい？ 難しいよ？」

「念写能力の獲得？ 否！ 断じて否！ ノートをとるという煩わ

しさからの解放!!」

「確かに煩わしさからは解放されたいがな……」
「しょせん嘘だろうしな。」

「では秘伝の術、ご教授しよう」

「いえーい！ やったー！ 愛してるー！」

だが二人ともノリノリだ……。

「ではまずノートに授業内容に則したことを書き綴ります」

「ほうほう」

おい、ノートをとる煩わしさからの解放がいきなり崩れてないか。

「次にノートにつづった内容を一言一句逃さずに記憶」

「きゅんきゅん、きゅんきゅん。ただいま頭のハードディスクに記憶中でありマース」

太陽拳みたいなポーズをしながらそんなことを言っている凜の姿は滑稽だ。

「そして黒板に早急に視線を移す！ カメラのシャッターを切るように瞬き数回！」

「デリラッシャー！」

雄叫びがうるさい。

「すると！」

「するとおー？」

「ノートに書いた内容が……黒板に写されている」

「何……だと……？ ま、まさか板書をノートに写すのではなくノートに書いた内容を板書にするための念写!？」

「そうさ……」

「で、でわ、今までの授業の板書はすべて平郷が黒板に念写したものであったのかっ！ なんてこった。こいつぁ大事件だよ。これで煩わしさからの解放！」

「ノートは自分で書く必要があるだろ」

「そんなことは些細な事さ、関係ねー！ 考えても見てよ、自分のノートが板書になる。これでいちいち黒板を見る煩わしさからの解

放！」

「それ言いたいだけだな……」

「あ、バレてる？」

「あと悪ノリをやめろ」

そついうと二人してため息をついて

「念写なんてできないよ。前髪掻き分けてノートとるだけ……」

「いやまあ、だよなぁ」

一瞬で素に戻った。それにしても平郷のテンションの差が激しい。

「おい平郷！　つきから本当にうつせーんだよ！」

そして平郷が素に戻ったとたんに因縁つけられるのはいつものことで。因縁をつけてきた宮島を一瞥すると舌打ちひとつしてそつちへと向かっていった。

「うおう、放課後痛めつけられるフラグだねえ。……ちと悪いことしちゃったかも」

「なら放課後止めに行ったらどうだ」

「ヤダよ、なんかされるかもしれないし」

そんなことを言ってるなか、二時間目の開始を告げるチャイムが鳴り会話は打ち切り。数学の教科書をカバンからだす。

「平郷が痛めつけられるってなんとなく想像できないねえ……」

凜のつぶやきが何となく耳に入ったが事実としてあいつはそういう目に合ってるのだ。そして私はそれを知りながら放置している……

……。正義感などないに等しいが妙な罪悪感がある。……。私には関係ない。あいつがどんな目に遭おうとな。

ハルウララ でも屋内

HRが終わりクラスがクラスメイトの声でにぎわう。いつもなら私もうるさいクラスメイトの間を縫ってとっとと帰路に就くところだ。

が、今日はそういうわけにはいかない。生徒指導室へのご招待が待っている。はっきり言って何よりも面倒臭い。意味もなく這いずりのた打ち回った方が、まだ楽しそうだ。

帰ろうか。帰ってしまおうか。帰らずに図書室で居眠りでもしようか。……明日には倍以上の説教が待っていること請け合いだ、やめておこう。

「お勤めいってらー」

はちきれんばかりの笑顔の凜がそんなことをぬかす。なんだ、他人の不幸は蜜の味とでも言いたいのか。一発殴っておこうか、受け止められてカウンターもらうのが関の山だろうが。

「……さっさと行ったら？」

同じく笑顔、そして抑揚のない声でそんなことを言う平郷に軽く殺意を憶えながら鞆をひつつかんでクラスを飛び出す。正直こいつは殴られていい存在だと思う。

一階、職員室のすぐ脇。生徒指導室。まあ反省文は今までと同じ内容書くとして……説教が長くなかったらすぐに帰れそうだ。反省のかけらもない、単なる今までの焼き増しに過ぎない文字の羅列を反省文

と認められればの話だが。

まあ、何はともあれ入らなきゃはじまらないと生徒指導室の戸を開ける。

「失礼します」

「あ、赤城さん。さっさと入って」

……脈絡なしに夏目がいた。

「どうして夏目なんだ。生徒指導の筋肉達磨はどこにいった」

「筋肉ダルマって……確かにその通りだけどさ。早川は奥さんの陣痛が始まったって病院へ」

私以外いはいえ教師を呼び捨てにしてるお前はあだ名を非難する資格がないように思う。そんな資格、心底どうでもいいが。

「今日は職員会議の日みたいでほかの先生も手が空いてなくて、それで同じクラス委員の俺が白羽の矢が立ったわけ」

「お前相当な暇人だな……。こんなことに付き合おうなんて本当の暇人だ。並の暇人はこんなことしないからな」

別名はお人よしか。断っても別の教師に白羽の矢が立つだけだろうに。

「そう思うなら反省文書いてよ。さっさと帰りたいとは思ってるんだから。暇じゃないよ、一応」

「よし、ならば今から二人で帰ろう。お前がここにいなかった、私は誰もいない指導室でいくら待とうと来ない筋肉ダルマが指導の件を忘れたと思い込んで帰ったという設定で」

「……確実に俺も説教くらうよね、それ」

「当たり前だ。どうせ私は明日説教くらうだろうからな」

「今回は忙しいから説教はなしっていったよ。サボったらさすがにあるだろうけどさ」

「説教なしだと？ それをはやくいえ、俄然やる気が出てきた」

あのやる気を大いに削ぐ説教がないなら喜んで反省してるっぽい文を書いてやろう。反省文は『反省してるように見えて全く反省してない文』の略だということをこの手で見せつけてやる。

「はい原稿用紙。五枚目の半分までは書けてさ」

くく、たった三枚の原稿用紙では私を止めることはできん。今なら六枚でも八枚でも書いてやろうではっんあ！？

「待て……五枚か？ 五枚なのか！？」

「そうだけど」

聞き間違えじゃない。数えればちゃんと200字詰め原稿用紙が5枚ある。馬鹿な、去年は3枚だったのに進級したからと言って二枚も増やすか!?

「五枚というとあれだぞ、400文字も余計に書かなければならないじゃないか」

「そうだね」

「なんということだ……こんなはずじゃなかったのに、なぜ?」

「赤城さんは常習犯って言うてたから、それもあるんじゃないかな」そこをつかれると否定が全くだきん……

「ほらシヨック受けてないで書こうよ、早く書き始めないと本当に日が暮れる」

「手伝え、いや手伝ってくれ、ください!」

「ムリ。書いたことないから」

「ええい、つべこべ言わずに手伝え」

「黙って書きなよ」

自分からとはいえ巻き込まれたみたいになやつに求めるのは酷か。そもそも無茶な要求だからしょうがないか。

さて、占めて1000文字。遅刻の反省文でどうやったらこれだけ書けるというのか。……それは600文字の時点で言えるか。よく考えたらよくそんなにかけたな。

「とりあえず書けるとこまで書こうよ。いつまでたっても終わらないじゃないか」

「ああ。書くことが無くなった時のことは考えずに書くよ。果て無く面倒臭いけどな」

とはいうもののどうにもならないのは目に見えている。本当に書けるのか?

カリカリとペンが紙を擦る音と紙をめくる音だけが部屋を支配する。一方は三枚目に突入した原稿用紙に悪戦苦闘し、一方は無表情

に小難しそうな本を読んでいる。

二人の間に壁はない。だがその間には確かに壁がある。

一方は苦渋と苦悩に苛み、一方は何も考えずに安息の時を過ごしている。両者の差は何か。いったいどんな違いがあるというのだ、いったいどんな……

「などという意味不明な供述を繰り返しており……」

「捜査は混迷を極めている模様です。……行き詰った？」

心配そうに用紙を覗いてくる。

「いや。うまいこと水増ししながら進めている」

少なからず血迷って変なこと考えるだけの余裕はある。行き詰る可能性は大いにあるが。

「ん、それはよかった」

まあちんちん時計をみているあたり夏目も何も考えてないわけじゃないんだろう。本当は暇じゃないとは言っていたしな。

「書けそうかな」

「さあ、どうだろうな。まだ結構時間かかると思っていた方がいいぞ。あと1と半分だが」

3枚目が終わり4枚目に入る。さあ、どういう方向に水増ししてくれようか。

「まだかかるか。……俺はそんなに早く書けないから文句は言えないけどさ」

「そういえばお前暇じゃないと言ってたか」

「まあね。とはいっても特売だけだね。商店街の第三・第五火曜日の」

……第五も特売なのか？ 私は買い物しないからわからん。

「米買わなくちゃ、米。一番の食客がいなくても減るの早いんだよ」「家事とかもお前がやってるのか？」

「付け焼刃だけどね。ほら手が止まってるよ」

そう言つと再び読書に戻っていく。私も急いで内容の水増しを続ける。早く帰りたい、その一心で文字を連ねる。……本当にいつ終

わかるからんからな。夏目には悪いことをする。

あ、でも何となく楽しい。適当に文章水増しするのは結構楽しい。まあ面倒臭いけど楽しい。……ああ、楽しいけど至極面倒臭い……楽しいだけで止めておけばよかった。

でもここまでどうにかなってるのが奇跡みたいなものか。どうにもならないと思っていたし、大きな詰りも今のところなし。絶好調ではないか私は。あ、こういうのは天狗になったとたんに行き詰るのがお約束だがそんなことはないように頼む。

「あと1と1/4だ」

「報告いいから早く書いてよ」

夏目の笑いを噛み殺したような声を聴きながら、次の水増し文を考えながら、行き詰ることが無いことを祈りながらペンを進め、って

「ちょ、字間違えた。修正液よこせ」

「ないのにボールペンで書いてたんだ。ちよつと恐ろしいな」

……妙にカッコつけながら書くものじゃないなあ……

ハルウララ でも屋外はこんなの

何もしていないときは退屈。なにかを待つときはもつと退屈。人を待っているとは一番退屈。それはこれから楽しいことをするわけじゃないし、今アイツが楽しいことをしてるわけじゃないのは知っているから。もしかしたらアイツは内心楽しんでいるのかもしれないけれど、それはただのちっぽけな優越感だつて知ってる。

アイツは、平郷は「自分を必要としてるなら飽きるまで相手をしなさい」。そう言ってた。それは自分が飽きるまでの？ それとも相手が？

あなたにとってイジメは本当に暇遊びつぶしなの？ ただ力に屈して現実から逃げているだけじゃないの？ たとえそうじゃないとしてもあなたの考え方じゃ同じこと、ただの報復睚眦におびえるいじめられっこ犬。

『自分は強い。』

『本当なら楽勝だ。』

『でも必要以上に傷つけない。』

違う、ただ怖いだけ。相手が怖いだけ。わたしにはそうとしか見えない。できるならやってほしい。ああいう手合いには少しやりすぎくらいがちょうどいい。

だけど、この考えを言ったらきつとこうかえされる。

『優越感だけで物事に口を挟んでくれないでほしいね』

『僕がどんなことをしていようと君には関係ないんだから』

これを言われたら時には平郷は聞く耳を持ってないから黙るしかない。

でも決してわたしは優越感でモノを言っているわけじゃない。ただ平郷が心配なだけ。これ以上不必要に傷ついてほしくないだけ。平郷がそんなことをされていると思うだけでなにも喉を通らなくなる。夜が白んでも眠れなくなる。その顔を見ても素直に笑えなく

なる。

でも言っても聞かないからもう、目の前でバカやってやる。

そう今すぐに、いま昇降口から出てきやがったその他大勢にとつてどうでもいいアンチクショウに向けて、恨みつらみ思い乙女その他全部ぶつけやんぞ！ 突撃、飛び込めえー！ くらえ、わたしのマシンガントローウ！

「いつまで待たせんさー。テメーがいないとわたしや帰れないんだからさ。まったくいつたいなにしてんのさ。この凜ちゃんが本気で待ちくたびれてんのよ、もうくたびれもうけたよ。いや勝手に待ってたんだけどさあ。でもまーひとまず喜びなよ、自分で言うのもなんだけどこんな口リ美少女が待ってたんだよ、ほらもつと喜びなよー。どーせわたしは待ってるのを期待してんだろ、このこのお。本気で待ってたんだからなー。わたしは平郷が校門来るのをずっと待ってたんだからなー。トイレにも行ってないんだぞー、尿意が湧かなかったから、ってだったら当然か。でも湧いてもいかないよ、すれ違いになつたら困る！ 誰が困るって主にわたしが困る！ お前が困んなくてもわたしは困る！ ……だから平郷！ おみやーとわたしがかんけー無いわけねえのよ、このバーカ！ オラ、とつと帰るぞ、ドサクサまぎれに手でも繋ぎやがったらお仕置きしてやんぞ、ほら手だせ、手をー。お仕置き恐れず繋いできたら困るからわたしから繋いでやろう、光栄に思うがいさ！ いつも心の準備ができてないから繋げない、次はいつできるかわからない超がつくレアなイベントだぞ、どーだうれしいだろう、さあうれしいと言え、さあ楽しいと言え、さあ可愛いと言え、どんなこと言われてもわたしは動じないぞお。今日のわたしはタナトスすら凌駕する存在だ、どうだすごいだろう！」

「……………」

「うう、なんか言えよ、沈黙で返さんでよ。わたしがバカみたいじゃない」

「……もうちょっと静かにゆっくりお願い。あと君は生粋のバカ」

「よし、りょかい！ ってバカってどーいうことだぁー！！」

「わざわざ待ってるから言ってるの……」

「んだと、おらー！」

さみだれ 鍋に塩塊

5月9日。曇った空から気まぐれに太陽が顔を出し光を射している。ただこれからひと雨降ろうとでもいうのか、雲はだんだんと厚くなり陽の光を通さなくなっていた。

私はなんとなくその空を家庭科室前の廊下から見つめて『今日の降水確率はいったい何%だったか?』と考えたが今日も弓素に引つ張られながら遅刻ギリギリで駆け込んだことを思い出し『まず天気予報自体見ていない』と結論に達した。ついでに『ああ、そういえば出掛けに母に呼び止められた気がしたがあれは気のせいではなかったんだな』とまあ気づいたところでどうにもならないことにも気が付いた。もし降ってきたら傘持ってきてないから帰りはどうしようか。凜は部活動は真面目にやらないくせに何やら居残っているし弓素に入れてもらうしかないか。

私もいい加減部活に顔を出さなきゃならんだろうな。真面目にやらなきゃ内申に響くだろうし……遅刻を平然とするような奴が内申を気にするとか一種のお笑いだな。気にしなくちゃならんのだが気にしてるような行動を一切取っていないのが問題か。まあ私の性分は怠け者だからな、当分改善はなさそうだ。

とそんな取り留めがあるんだかないんだかわかんことを考えているうちに休み時間終了を告げるチャイムが鳴った。私は曇った空を一瞥すると家庭科室に入っていた。

「……とつとと始めさせよう」

背中から凜のぼやきが聞こえる。家庭科の霧島がすでに授業時間の半分を説明に使ってるのでわからなくもない。

今日の家庭科は席順で分けられた4人班での調理実習。実習台には私の朝の時間を奪った憎き三角巾とエプロン。これを用意する必要がなければ今日は走らなくてもよかった。

私にとっては調理実習はただ面倒臭いとは思えない。食育の重要性というのは理屈では理解しているがわざわざしなくてもいいような気がする。まあ簡単なインスタントやレトルト食品の充実してる今日日、こうでもしないと料理の仕方わからずに独り立ちするなんてこともありそうで怖い。私なんてその典型なんだろうな。

「さっさと始まらんかい」

……そんなことは置いといて後ろがうるさい。ていうか鬱陶しい。イライラする。

「うるさい。黙れ」

「わたしや腹減ったんだよ」

「そうか、なら黙れ。より腹が空くぞ」

む、と凜は口を噤む。むむむむ、と唸る。鬱陶しい。こんな些細なことにイライラするとは私も腹が減ってるのかもしれない。

「静かにしろ」

「るっさい、ガリ」

「黙れマメ」

ついには互いの身体的特徴で罵り合い。

「では、みなさん怪我の内容にお願いしますね」

そしてタイミングよく霧島からのGOサインが出る。ようやっとこのイライラから解放される……。

「さあ立て、さあ着れ、さあ被れ。とっとはじめてとっとうぞ。オラ早くしろ」

くすぶつてた凜に促され私も準備を始める。七面倒臭い限りだ。

今回の課題はナポリタン。パスタ茹でて野菜とソーセージを炒めるだけ。正に調理実習っぽいお手軽感。わざわざこれだけを作るために実習やるか？ と思えるほどに。

さあまず具を切れと言う話。真っ先に私に包丁が回ってくる。この班唯一の男子伏瀬は鍋だのを棚から引っ張り出してるからいいとして

「おい凜、手伝え」

「アイハラー」

「え？ あ、はい」

凜に呼ばれて相原が包丁を持つ。……おい待て。

「お前がやれ」

「料理は専門外だかね。私ははじめっから作る気ねーよ！」

「胸を張って言うな。料理は専門外だとか言うならせめて野菜を洗え、野菜を。それぐらいできるだろ」

「洗剤使っでいい？」

「……絶対使うな」

果たして食べる気があるのかさえ疑わしくなる発言だな。最近は野菜用の洗剤もあるのは知っているがそんなもの学校にあるとは思えない。

まあいい。凜が野菜を洗ってるうちにソーセージでも切っておくか。が、今度は相原がまな板上のソーセージを前に包丁を持ったまま固まっている。

「おい」

「え？ え、ええ、あ、はい、大丈夫です」

少しあわてた顔で返してくる。まだ何も言っでないぞ。

「だったら早く切れ。まさか切り方わからないとかいう箱入り娘じゃないだろう」

「い、いえ。そういうわけじゃなくて。ちょっと刃物が怖いだけですから大丈夫です。……多分」

……同じことだった。どの道箱入り娘みたいな……こいつ今までの調理実習どうしてたんだ。

「今までは明音ちゃんが手伝ってくれてましたけど、いつまでも頼ってられないですから大丈夫です！」

それは果たして大丈夫なのか。弓素のいる班に首を動かすと本人が心配そうに相原をちらちら見ている。なんぞものすごくダメな気がしてきた。

「大丈夫です。ちょっと、ちょこつとだけ指きっちゃったりしないかって怖いだけですから大丈夫です」

相原の謎の力説で余計それが加速した気がする。が、時間もなし本人がやる気ならやらせるしかない。

「わかったからとつと切ってくれ。肉は任せた」

凜が速攻で洗ってきたピーマンを掴みソーセージの方は全面的に相原に投げておく。もう本人ができるっていうならやらせとく。

そしてやっと調理器具と調味料を全部まとめて持って伏瀬が戻ってくる。横着な運び方だ。フライパンが鍋に入らなかったのか取っ手の方が突っ込まれてる。

「そんなぞんざいな扱いでよく怒られないな」

「うん。オレもちょっと驚いてる」

コンロの上に鍋とフライパンを置き、鍋の中から調味料やら食器を出してくる。

「ほら計量カップ」

「お、ありがとう」

さてこれから伏瀬が鍋に湯を沸かしパスタを茹でる間に、私は具を切り終えフライパンでそれらとトマトソースを炒めなければならぬ。そのためにはもう少し急いだ方がいいか。……包丁持つ手震わせながらソーセージ切ってる相原を手伝いながら

「あ、なあ相原。それ大きく切りすぎじゃね」

「え、あ、そうですか!？」

「いや別にそれでいいってんなら……。てか、ちょっとテンパりすぎ」

……でもちよつと前途多難の気がするな。いやかなりか。とりあえず今回はいいとして、またこの面子で調理実習やることになったら、絶対に相原に包丁は握らせない。これはもう決定事項として頭に刻み込んでおこう。……先端恐怖症だったりするのか、こいつは。

塩辛い。想像以上に塩辛い。

完成したナポリタンを一口食べた感想がそれだった。塩が効きすぎているのが前提で口に入れたが、それでもひどいものだった。

伏瀬は苦渋な表情でゆっくり咀嚼し相原は微妙な表情で口元を抑えている。

「……逃げていい？」

そんな反応を見た凜がふざけたことを言う。そういつと思ったからお前を毒見役にしたかったんだ。

「こっちのセリフだったの」

「いやさ、だってそんなもの食べたらわたしリアクションがまずよ！？ そりゃもう味皇様凌ぐ勢いで！」

「脅しになってねえよ！」

「……やっぱ食わなきゃダメ？」

「ダメに決まってるんだろ。塩はからずに入れたのお前なんだから」

「確かにそうだけど……あ、アイハラー！」

「ごめんなさい、擁護できません」

「だそうだ。私たちの分も食べるとは言わんから責任もって食べ」

ぐ、と口を噤むとさすがに観念したのかパスタを口に運ぶ。咀嚼し、嚥下。……もう完全に嫌いなものを嫌々食べる子供の顔をしている。

「……しーおーいーぞー……」

なんぞよくわからん王様をしのぐリアクションという前評判のそれはただの感想であつた。しおいてなんだ。男同士が絡むっていうアレか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6202u/>

赤弓渡の伏平夏!

2011年12月1日19時49分発行